う推測する。

「一番感じるのは『視野を広げたい』という欲求です。今自分が所属している業界がこの先、どうなるか分からないのに、そこにタコツボ的に安住していていいはずがない。もっと広く経済や経営につながる社会の事象を見るようにならなければという、危機感が根底にあると思います」

次に日本最大級の読書会コミュニティーとして知られる猫町倶楽部を見てみよう。会の名前は萩原朔太郎の散文詩風の小説『猫町』から取られている。通常の参加者は100人程度、多いときには300人にも達する。開催日時と場所、課題図書をネットで告知すると、あっという間に集まってしまうほどの人気だ。これまで、名古屋をはじめ東京、関西で400回以上も開催してきた。『カラマーゾフの兄弟』の新訳で話題になったロシア文学者の亀山郁夫氏、ミュージシャンで作家の菊地成孔氏など、多彩なゲストを招く運営力もある。

禁断の「仮面読書会」に潜入 女性主導の恋愛論に発展

読書会コミュニティー、猫町倶楽部主催の性を題材にした小説を対象にした読書会「猫町アンダーグラウンド」に、読書会初体験の記者が参加してみた。

花谷（はなや） 美枝（よしえ）（編集部）

会場はパーティーのような華やかさだ

仮面を被って背徳的な小説を語り合う――。18歳未満参加不可、大人限定の読書会が2014年11月3日、新宿ロフトプラスワン（東京都新宿区）で開催された。猫町アンダーグラウンドは猫町倶楽部が通常の読書会とは別に企画しているイベント。参加条件は課題本を読み、仮面を着用すること。約60人の参加者は、目と鼻を覆うアイマスク型からガスマスク、キツネの面までさまざまな仮面をつけていた。金色の刺しゅうを施したガウン、網タイツ、着物などおしゃれをした参加者が多く、ちょっとしたパーティーのような雰囲気。記者も東急ハンズで購入したベネチア風のマスクをつけて参加した。仮面のおかげで普段よりも3割増し色っぽくなった気がするから不思議だ。

今回の課題本はフランスの文学者、ピーエル・クロソウスキーの『ロベルトは今夜』と、同書を戯曲化した作家の山口椿さんによる同名小説の2冊。クロソウスキー版は妻に不倫をさせる神学者の倒錯した性と信仰を描いた実験的な作品で、かなり難解な小説だ。

読書会は6、7人ごとの班に分かれて行われた。主催者が初参加者から常連までバランスを考慮して班分けをしている。私が参加したのは20代から40代の女性4人、男性3人のグループ。本を開きながら話し合うため、照明は明るいまま。案外健全な雰囲気だ。

神学者の夫は、「無神論者」の妻に不倫させることで原罪と向き合わせようとする。内容を理解するためにはキリスト教の知識が必要で、エロスを期待した人にはちょっと厳しい。高尚な文学談議にはついていけないかも……と身構えていると、冒頭から「全然エロくない」など正直な感想が飛び出し、場が和んだ。「神学者の夫は、ロベルト（妻）に神の存在を認めさせたかったのでは」など、意見を交わしながら難解な作品を読み解いていく。谷崎潤一郎やマルキ・ド・サドとの比較など文学的な話題が出たと思えば、「匂いに関する記述が少ないのは男性作家ならでは。私の場合、エロスは匂いと結びついていて……」と自らの恋愛話に発展させる女性もいた。

文学に疎くても、読書会初参加でも、課題本が共通の話題になるので会話に参加できる。猫町アンダーグラウンドは今回で3回目。これまでにポーリーヌ・レアージュ『O嬢の物語』、マルキ・ド・サド『悪徳の栄え』を取り上げてきた。猫町倶楽部の読書会はインターネットサイトで検索をして申し込む人が多く、参加者の2割は初参加だという。29歳の男性は「本が好きだが、語り合える場がないから」と読書会に顔を出し、同年代の異業種の人との交流の輪を広げているという。休憩を挟んで約2時間の読書会の後は、仮面を外して懇親会になだれ込んだ。本の話から出発して、話題は仕事や私生活へ。読書会の後なので、自然と会話が盛り上がる。懇親会は22時過ぎまで続いた。

本が縁で結婚も

11月1日の関西猫町倶楽部は京都で開催。課題本はサリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』ではなく、このいささか難解な短編集にしたところが渋い。

六つに分かれたどのグループからも、案の定、「1話目の『バナナフィッシュにうってつけの日』ってまったく意味不明だよね」の声が続出。『ナイン・ストーリーズ』には野崎孝訳と最近出た柴田元幸訳があるが、両者をしっかり読み比べて、「野崎訳には1カ所、変な京都弁みたいなところがある」とマニアックな指摘をするツワモノも。「難解だったけど、他の人の話を聞いたら、再読したくなった」という感想も聞こえてきた。

代表者の山本多津也さんは読書会の魅力をこう分析する。

「自分だったら絶対に手に取らない本が読める、まるで違う解釈で読んでいる人がいて面白いなど、個人の読書では味わえない経験が魅力かな

と。また、『ああ面白かった』で終わらず、人前でその本の魅力や感じたことを語ることで、自分の考えを再確認し、定着させることができるのも、利点だと思います」

遊び心に満ちた仕掛けもある。例えばクリスマスの本だったら、クリスマスカラーの服を着る、どこかにクリスマスの刺しゅうがあるものを着るなど、ドレスコードを課していること。聞いて思わずニヤリとしてしまうのは、この会で出会って結婚した人が約30組、3カ月に2組くらいのペースで生まれていることだ。

「婚活中の人を求めているわけではないですが（笑）、結果としてそういう和気あいあいとした空気だということです」

次に、小規模な読書会も見ていきたい。書評家の杉江松恋さんが主催する「読んでから来い！」は、読破するにはいささか苦労する本をあえて取り上げる会だ。

月に1回ペースで、本はすべて小説。参加に際しては、感想や論点などレジュメを作ってきた人は参加費が500円、レジュメなしだと1000円と区別を設けている。だいたい10人程度、女性が6割で、大学生から50代まで年齢もまちまちだ。

「レジュメは論点となりそうな専門用語の数を数えてくるような分析的な人もいれば感想だけの人もいます。レジュメは明文化された思考の過程なので、議論が枝葉末節に入り込んだままになりそうなとき、そこに戻ることができる。読書会を進めていくための命綱として、紙は必要だと思います」

杉江さんには、大学時代の読書会の経験が、自分の文章のベースを作ってきた自覚がある。

「推理小説の研究会に入り、毎週読書会がありました。そこでの議論のスタイルが頭の中に取り込まれ、常に自分の中で会話しながら書くという基礎ができたんです。こう書こうとするともう一人の自分が『本当にそうか？』と介入してきます」

鍵になるのは会話的である、ということ。

「主張の強い人がいて、その人の話をみんなで拝聴する、というのが一番駄目。そうならないようにさばくのが僕の役目です。富岡多恵子さんの『湖の南』を取り上げたときは、『今までで一番良かった』という人もいれば、『なんでこんなのを取り上げるのかさっぱり分からない』という人もいて、議論が白熱してスリリングでしたね」

あえて人に見せる

もう一つ紹介したいのは、書店発の読書会。山梨県甲府市の春光堂書店による試みだ。

毎月第1金曜を開催日と決め、本を選んだ幹事がレジュメを作ってくることが暗黙のルールになっている。20代から60代まで、医者、自営業、公務員、大学の先生、会社員などさまざまな職業の人がやってくる。

読書会は、普段は室内で行われるが、夏場になるとアーケード街で行われることがあるという。いぶかしげに横目に見ながら人々が通り抜けていくが、これが見せる読書会、「まちなか読書会」だ。このユニークな会が生まれた背景には地方ならではの切実な事情がある。バブル期に作られ、今では少し時代と合わなくなっている甲府の中心部のアーケード街をどう生かしたらいいか、模索しているのだ。

「それでも甲府の地域資源であるこ

アーケード街で開催されることもある「まちなか読書会」